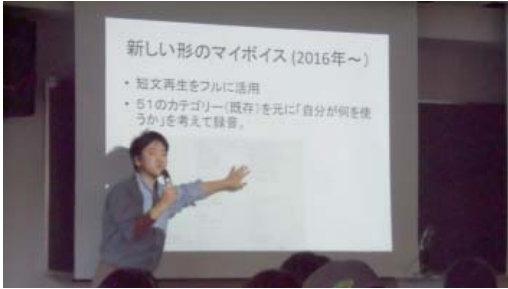


【 講演会報告 】



11月15日に慶應義塾大学言語文化研究所准教授の川原繁人氏をお招きして、「マイボイス：社会と言語学の接点を目指して」というタイトルで2017年度講演会を開催することができました。当日は、「音声学Ⅱ」の履修者を中心に、それ以外の学生や教員も含めて、124名が参加しました。ご講演では、マイボイスをテーマに、言語学・音声学がどのように社会に貢献できるかをお話いただきました。

マイボイスとは、ALS等の神経性の難病などで自分の声を失う患者様が、声を失う前に日本語の基本モーラを録音しておき、それを再生するソフトウェアです。HeartyLadderというキーボード入力支援ソフトウェアから音声を再生することができます。マイボイスもHeartyLadderも、無償で、操作・録音が容易なので患者様と介護者様だけで使用することができます。

もともと、HeartyLadderは、ご自身が脳性麻痺患者であるプログラマの吉村隆樹氏が開発され、マイボイスは、吉村氏と作業療法士の本間武蔵氏が開発し使用されてきました。その後、音声学である川原氏が関わるようになりました。

マイボイスは、他の音声合成ソフトと異なり、「自分の声で話す」ということを大切にされたソフトウェアです。ご講演では、数名の患者様のインタビュー映像などを通して、なぜ自分の声なのかをお話いただきました。自発呼吸が難しくなっ

た場合には、気管切開をして人工呼吸器をつけて（＝声を失って）生きるか、死を待つかしありません。その状況で、実際に多くの患者様は死を選んでいるという現実があります。しかし、マイボイスを知って気管切開を躊躇なく選べた患者様がいます。また、自分の声で話せるということは、ご本人だけでなくご家族にも大きな喜びです。マイボイスは、患者様やご家族・看護する方のためのもので、患者様と介護者様が共同で作りに上げていくものなのです。

そのマイボイスについて、言語学者・音声学者は、音質改善に貢献できます。音声の基本的単位であるモーラの音量調節、音の長さの調節、高さの調節、波形の切り出し方、また、Praatという音声分析ソフトウェアによる処理、アクセントと高さの関係、「は行」音の切り出し方などについて、これまでに協力してきたことが紹介されました。また、脳性麻痺の患者様が明瞭に発音しようとする例では、調音点や調音法のような音声学の知識が医療の現場で使われていることも紹介されました。

講演後には、活発な質疑応答がありました。また、後日提出されたレポートでは、言語学・音声学が役に立っていることを知ることができて良かったなどのコメントが多く寄せられました。

マイボイスのワークショップが、年2回程度、慶應義塾大学で開かれているので、関心のある方は参加してみたいかでしょうか。また、川原氏は、音声学を様々な側面から紹介する入門書も執筆されていますので、関心のある方はご覧下さい（『音とことばのふしぎな世界：メイド声から英語の達人まで』[岩波書店、2015]、『「あ」は「い」より大きい!?：音象徴で学ぶ音声学入門』[ひつじ書房、2017]）。
(文責：小松雅彦)